

ユニット1 ワークショップ 宗教とジェンダーの最前線Ⅲ

開催日時：2021年3月2日（火）13:00-16:00

会場：zoom ウェビナー

参加者人数：約150人

■プログラム：

挨拶

金承哲（NIRC 所長）

岩田真美（GRRC センター長）

清水耕介（GRRC ユニット1 リーダー）

発表1 「ジェンダーに対する江戸時代の臨済宗の立場をめぐって」

竹下 ルッジェリ・アンナ（京都外国語大学教授、GRRC 研究員）

コメンテータ：ティム・グラフ（NIRC 編集員、南山大学助教）

発表2 「金光教におけるジェンダー／セクシュアリティの諸相」

藤本拓也（金光教国際センター研究員）

コメンテータ：小松加代子（多摩大学教授、GRRC 研究員）

総合討議

総括：川橋範子（国際日本文化研究センター客員教授、NIRC 研究員、GRRC 研究員）

■総合司会：小林奈央子（愛知学院大学准教授、NIRC 研究員、GRRC 研究員）

【報告のポイント】

2018年以來、南山宗教文化研究所がプロデュースしてきた「宗教とジェンダーの最前線」のシリーズを、本年度は当センターとの共催で開催した。三回目となる今回は、竹下 ルッジェリ・アンナ氏が近世を中心とした禅宗の尼僧の活動を、藤本拓也氏が明治期の立教から現代までを視野に入れた金光教の活動についてそれぞれ発表。グラフ氏、小松氏のコメントのほか、フロアからの質問にも応じつつ、活発な意見交換の場となった。

シリーズタイトルにある「最前線」とは、最前線に立ち続けること、先達の立場を引き継ぎつつ継続してジェンダー研究を進めていくことを意味している。それを実現する場となるように、との希望のもとで開催された本会。ジェンダーをめぐる各宗教団体の歴史や活動事例、抱えている課題が共有され、問題の可視化にむけた好機となった。

【報告の概要】

コロナ禍にともなう感染防止のため、本研究会はオンラインで開催された。竹下氏、藤本氏の発表に対し、グラフ氏、小松氏がそれぞれコメント。司会是小林氏が担当した。報告内容は以下の通りである。

竹下 ルッジェリ・アンナ氏は、氏が長年研究対象としてきた白隠慧鶴（1686-1769）とその女性の弟子たちについて、これまでの研究を踏まえて発表した。

白隠の活動した江戸期は、女性が意思決定をすることが難しかった時代。その背景には儒教思想の普及など複数の要因が考えられるが、仏教の「五障」や「変成男子」の思想なども

状況を後押ししていたと言える。そうした時代を生きた禅宗の女性修行者たちには、男性と平等に修業を行うために自らの顔を焼いたという伝承が多い。無外如大禅尼（1223-98）や慧春尼（?-1408）のように江戸期以前からその伝統はみられ、頬を焼く了然元總（1646-1711）を菱川師宣（1618-94）が画題としていることから、そうした女性たちの姿が社会にも知られていた状況がうかがえる。道元（1200-53）や盤珪（1622-93）に比べ女性の弟子が少なかった白隠だが、資料からは8名の出家と在家の弟子の名が伝わる。また、残された手紙からは、尼門跡たちとの親交や、在家女性たちとの交流が読みとれる。白隠が、女性を男性同様に「下化衆生」の対象とみなすとともに、禅の道は老若男女、出家在家の別を問わないものであると考えていた可能性を提示した。

これに対し、ティム・グラフ氏は現代日本の曹洞宗を研究対象とする立場からコメント。「文化、政治、宗教など、社会と関わる学問を志す場合、ジェンダーの視点なしに公平な研究を進めることは本来難しいはず」としたうえで、広い視野から白隠の女性観や尼僧たちの行動に着眼する竹下の研究を評価した。そのうえで、尼門跡以外の一般の尼僧の事例は知られるのかについて質問。竹下氏は、白隠が浄土宗の尼僧にも手紙を書きおくなど女性宗教者たちとの関わりがあったことを紹介する一方で、近世の尼僧に関する資料の乏しい現状を吐露。今後の寺院でのフィールドワークの必要性を強調した。

次いで藤本拓也氏は、認可団体としては宗教団体初となる LGBT 会を設立するなど、ジェンダーの問題に積極性を見せる金光教について、その歴史を紐解きつつ報告した。

1859 年、岡山県金光町で金光大神により立教された金光教。教祖時代には、「千人に一人の氏子」と呼ばれた高橋富枝（1839-1921）をはじめ、多くの女性信者が活躍した。明治大正以降も、花街での布教により苦界に生きる女性の救済に力を注いだほか、北米・南米布教でも女性が活躍。昭和以降もカリスマ的女性が大教会を設立し、弟子を育成した事例がみえる。ただし、現在、教団運営の中核は男性で占められている。こうした状況は、本教団が本来保持していた価値観に基づくというよりも、近代における世俗の価値観への迎合に起因する可能性がある。近代のヒューマニズム概念は、当時の指導者層を中心とした男性モデルから析出された理念形といえる。言い換えれば、女性たちの通俗道德の遂行には、男性への従属が前提であった。一方、「人はみな神の氏子」「氏子が助からねば神が助からん」という、近代的なヒューマニズムを超えた「神対氏子」（教師/信者）の関係のなかで本教団は形成されてきた。教祖のことは聞き、不平不満だらけの「悪い者」であったとの自覚を経て、神の呼びかけに改心し、篤信の氏子として活躍した荻原須喜（1853-1925）のように、神に主体化された氏子たちが相互に存在を肯定し合うことで救済がなされている。女性を下支えの存在とみなしてきた歴史を認めただけで、状況の打開にむけたジェンダースタディーズとの協働に意欲を示した。

対して小松加代子氏は、金光教の柔軟な活動に期待を寄せつつも、近年、LGBT への寛容さの比較が行われがちな宗教界に対し、他の宗教との違いを示す宣伝にならないように、と警鐘を鳴らした。また、「神からの呼びかけによる改心によって、通俗道德的価値観に基づく生き方からの転換が起こり得る、という指摘は興味深い」と評価したうえで、神からの呼びかけが、権力や共同体の圧力下でないことを如何に確認できるかについて質問。「悪い者」への自覚が押し付けられないか、呼びかけへの振り向きと権力への忖度との違いを明確に

できるか、と問いかけた。藤本氏は、教祖が性別を問わず同様のことを説いていること、悪い者としての自覚が信仰者として成長するうえでの糧となることを解説。ただし、権力構造と見極めの難しさについては、全ての宗教に内在する問題かもしれない、と返答した。

フロアからは「江戸時代の禅宗では、宗派公認のマニュアルとして定められた女性の身体を男性化する修行方法はあったのか」、「弟子を指導できる立場にある尼僧は例外的だったのか、あるいは一定数いたのか」、「LGBT 会が認可されて以降、LGBT 会のメンバーは、教団内で自身の立場をオープンにしているのか」、「教団の拡大期において顕著であった女性信者の活躍が次第に男性主体の教団運営になっていったことには、世俗社会への迎合以外にも教団内在的な要因はあったのか」など、多数の質問が寄せられ、活発な議論が交わされた。

総括の川橋範子氏は、宗教とジェンダー研究は、いまや女性研究者、女性宗教者、そしてジェンダーの問題に自覚的な男性研究者のネットワークなしには成り立たないグループエフォートになっている、と指摘したうえで、現在、各宗教系団体においてジェンダーをめぐるアクションが散発的に起きている事例を紹介。組織的に連続していない動きをどう繋げてひとつの潮流としていけるか、そこに GRRC の存在意義があるのではないかと期待を込めた。これまでジェンダー研究と宗教研究は、不和やお互いへの無関心が指摘されてきたが、近年、両学問分野を横断する動きも出ている。これがさらに大きな流れとなるように願っている、と締めくくった。

(文責 ジェンダーと宗教研究センター)